



八王子旅館（新）



八王子旅館（旧）

煙突と路

旅館の煙突は何を見つめ、何を物語ろうとしていたのか。戦後間もなく開業した「八王子旅館」と煙突。繁栄期には、ひっきりなしに利用客が玄関の暖簾を潜った。

唐破風の真上に蔦の紋がある一間程の玄関は、風雪の歳月が伺えた。午後になると、煙突から煙りが立ちのぼるのが見えた。

が、・・・今はもう無い・・・

鉄枠に支えられた老いた煙突が・・・その近くに小野路道が通る。

白笹稻荷がある路地は、古の小野路として細々と残る。

遠慮しているかのように・・・短い路の間には、暖か味があり穏やかさがある。

この昔懐かしい風景は、時代の移り変わりと共に消えていく運命なのだろうか・・・

◇散歩のみどころ

JR八王子駅南口から京王線北野駅迄の小野路道を歩き、さらに浅川の堤防を散歩し、八王子駅に戻る凡そ6kmの行程で、戦国時代の路を見聞。興林寺から駅の西側に僅かに残る小野路を通り、小野路橋を渡る。六本杉公園で小休止。八坂神社を経て、再び子安町一丁目五叉路北の細道、小野路道から滝不動尊へ。ここからの道は小野路踏切まで、古の面影が伺える見所である。

煉瓦工場引込線跡の橋脚を見た後、七日市場跡、六万坊通り、天龍寺、塩竈神社、そして北野天満宮へと辿る。この神社には、縄文時代の住居跡や板碑等が保存され、見所の一つ。小野路道はここまで。ここからは、由井小学校の赤煉瓦の門、煉瓦工場跡地を見ながら、湯殿川と浅川の合流地点へ。堤防伝いに歩き「あったかホール」で一休み。ここで自由解散。JR・京王八王子駅へ。

●小野路古道とは

戦国期以来の道の名であって、子安村から猿丸峠(野猿峠)を越えて、下柚木、越野を経て、小野路村に出る、府中方面から南下する鎌倉街道に合した道である。

江戸期には小野路街道あるいは、小野路往還とも呼ばれ、現在は八王子駅南口付近の都道百六十号線(野猿街道)と部分的に重なり、子安五差路から北野(打越インター付近)をへて野猿峠を越え、下柚木の越野まで続いているが、大型宅地造成(多摩ニュータウン)によって古道は寸断されている。

大型宅地造成が行われていなければ、下柚木の松木から別所をへて唐木田付近を通って町田市の小野路町へつながり、野津田付近で鎌倉街道と合した古道と思われる。

ちなみに野猿街道は越野から都道二十号線に変わり多摩市内の一の宮付近で川崎街道に合した道である。



興林寺南側の小野路古道



興林寺東側の小野路古道

●横山党とは

平安時代九世紀後半から鎌倉時代十二世紀前半武蔵七党の中で最大勢力を持つ武士集団。

党主小野諸興は、天慶二年（九三九）、天慶の乱の後に小野郷（府中から多摩辺り）から横山（八王子から由木辺り）の地に移り、地名をとり姓名を「横山」と改め、横山義孝と改名。一族と共に横山の開発にのりだす。

小野（横山）の先祖は小野妹子に始まり、文人で歌人でもある貴族の小野篁（たかむら）から続き八代隆泰の時、地方官（国司）武蔵守として小野郷に着任した。任期が満ちても都に戻らず、未墾地開発のため横山の地に永住し九代の諸興が横山氏（党）の祖となった。

建暦三年（一二一三）五月時兼の時、北条氏と対立していた和田義盛が挙兵した「和田の乱」に参戦し敗北。義盛と共に横山党一族は滅亡。

●子安の地名考

子安村（現、子安町）は、江戸期から明治初期にかけての村の名である。村名は鎮守であった子安明神社（現、子安神社）によるといわれている。

神社の由緒によると天平宝字三年（七五九）橘左京少輔なる人が時の皇后の安産を祈願して子安神社をこの地に創建されたといわれ、子安とは「子宝に恵まれ安産で授かる」という意味であるという。



子安神社

●子安宿と子安村

江戸中期に子安村の一角に子安宿が横山、八日市宿の加宿（八王子十五宿）として起こった。

子安村は江戸期からの多摩郡由井領のうち、現在のJR八王子駅南口（子安丘陵）付近一帯をいい、東側は一部現在の明神町と北野町に編入されている。

現在八王子駅南口付近から南東にかけて猿野街道といわれる小野路がサザンスカイタワー八王子の中を通り北野方面につづいている。

税務署近くの興林寺辺りには、古甲州道や川越街道（八王子道）が近郷に伸び、八王子宿にとっては軍事、産業の重要な街道だった。

明治十五年（一八八二）八王子十五宿と子安村、元横山村、新横山村の一宿三村が合併し、八王子町となり、現在旧市内といわれている地域に入っている。

① 佛法山徳善院興林寺

子安町四一四―一八

宗派 浄土宗極樂寺末

本尊 阿弥陀如来

開山 本蓮社願譽興阿林忠天龍上人

開基 西山九郎兵衛

開創 天文十二年（一五四三）

境内には弘安の板碑や開運灯籠の逸話がある。また毎月三日には念仏会を行っている。同寺は昭和二十年（一九四五）の八王子空襲時に焼失、本堂は昭和四十年代に再建され現在に至っている。

昔は八王子道または川越街道（現在の国道十六号線）と、境内地南側を抜ける鎌倉街道の枝道であった小野路街道と、最古の甲州街道の交差点。歴史的にみて交易上、戦略上、重要な地点であった。



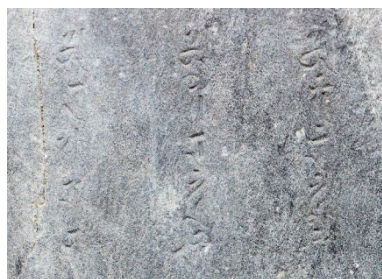
蓮華座上月輪内に刻まれた、阿弥陀如来の種子「キリーク」



板碑



興林寺



大日如来三身真言（種悉地真言）
右：「ア・バン・ラン・カン・ケン」
（大日法身真言）
中央：「ア・ビ・ラ・ウン・ケン」
（大日報身真言）（胎藏大日真言）
左：「ア・ラ・ハ・シャ・ナウ」
（大日応身真言）

● 興林寺の板碑
大正時代頃、歴代住職の墓地で頭部が見える状態で埋没していたのを掘り出した。青石塔婆（緑泥片岩）で上部に阿弥陀を示す「キリーク」という梵字。下部に供養者の極樂往生を祈る国内でも珍しい大日如来三身真言（三種悉地真言）が記され、弘安六年（一二八三）禅尼覚心と刻まれている。三角形の頭部はないが、薬研状に彫られた阿弥陀如来の種子が見事。八王子市指定有形民俗文化財で現在板碑は覆屋に納められている。

●伝承「開運燈籠」

興林寺境内に昔、大久保長安が佐渡金山奉行の時、上杉謙信の燈籠をこの地に運ばせたが慶長十九年に大久保家（長安）が断絶になったので、寺では徳川將軍の威光をはばかり、寺の裏手（竹藪）に隠して置いた。八日市宿の甲州屋伝左衛門という人が寺参りにきて燈籠を見つけ何気なく撫で擦って帰ったところ甲州屋の運が開け好事に恵まれたというところから、開運燈籠として親しまれたという。



開運燈籠

●小野路橋

JR八王子駅南口から小野路街道を五、六分歩くと山田川にでる。そこに架かる橋が小野路橋である。昭和六十二年（一九八七）に耐久性の橋に生まれ変わっている。河川工事が始まる以前は浅い川で、大雨が続くと家や田畑に冠水する騒ぎもあったという。昔の川は自然がいっぱいで、鰻、鮒それに鮠などの魚がたくさん捕れたという。



山田川に架かる小野路橋
(八王子駅南口野猿街道裏)

②六本杉公園

子安二丁目

子安丘陵の先端部にある面積九〇六七㎡の湧水のある児童公園で、市内の児童公園としては船森、天神、曉について四番目に、昭和二十六（一九五一）年四月開園された。

昭和の始めごろは、湧水の台地の先端から田園風景が広がる農村地帯だった。昭和十六年四月に市立第六小学校が開校、同二十六年（一九五

一）四月市立第三中学校が開校。緑豊かな自然の理想的な教育環境地となった。

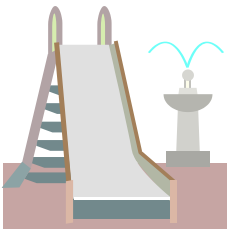
公園内には六本杉があり、開園当時には杉の根本から湧き出る水を池として整備したが、宅地化の波で市内における湧水がつつぎと枯れて行き、六本杉公園の湧水も細り杉も枯れてしまった。

今は植林樹木が生長した公園となっている。

尚、池には人口的給水は行っていない。(市水道部・公園課)

又、この公園辺り(子安二丁目)は昔「藤井」とよばれ、湧水の傍らに一本の藤の木が茂っていた。また湧水をたたえた所が井戸といわれた事から地元では湧水池を「井戸山」と呼んでいる。

藤井については遊行僧の伝承が残されている。湧水のほとりに草庵を結んで住み、六万部の経を修しながら付近の人々を教化したといわれる僧侶を供養するため、六万部の経を埋めた所が「ろくまんぼう」といわれるようになった。現在、地名が野猿街道「六万坊」の信号に残っている。「藤井」とは子安町一丁目の小字名である。



池



湧水

六本杉公園

③北野の八坂神社

北野町七十六(小名・七日市場)

祭神 素戔鳴命(すさのおのみこと)

社宝 神興一基、鉢一對

獅子頭一對

例祭 七月二十五日

勸請、創建年代は不詳であるが、一説には、室町時代の南北朝期に、七日市場の中心に八坂明神を奉斎し、疫病除の神として崇敬したといわれている。

昭和五十年(一九七五)七月コンクリート銅板葺の社殿を再建、例祭日には、北野天満宮境内に神興の渡御が行われる。氏子構成は北野天満社と共通となっているという。



神輿



八坂神社本殿



八坂神社

●七日市場とは

北野町西部

室町から戦国期の大石氏から北条氏（氏照）の最盛期に興した現北野町西部地区（バス停六万坊辺り南）の集落で小名を「七日市場」といい、八王子の市日が定まる以前から子安村の十日市場と共に、毎月定期的に「七の日に」市立てをしたと伝えられている。

また、大正八年（一九一九）四月二日、卒業テストで立川飛行場を飛び立った陸軍飛行隊の三井大尉機が、操作を誤り翼が高圧線に接触し七日市場の六万坊の原っぱに墜落した事も知られている。

この事故の碑はバス停南側の市道より十m程奥の民家の裏側に、「陸軍歩兵大尉、三井文雄飛行遭難地」と刻まれた石碑が建てられていが、平成十九年（二〇〇七）から二十年（二〇〇八）頃三井家の親族が碑を移し、現在は住宅地になっている。

④小野路古道脇の滝不動尊

子安町一丁目

子安五差路信号から、北野方面に向って六万坊の信号がある辺りまでの野猿街道の裏道は、小野路古道といわれ、崖（はけ）になっているが細い脇道が三五十m程続く（宅地が道より下にある）。その傍らに子安一丁二丁目会館敷地があり、隅に滝不動尊の祠が建つ。中の御本体は不動明王の化身で竜王の一種。型像は石盤の上に立って剣に巻きついた黒竜が剣を呑む状を示し、火炎に覆われている。

不動尊の事について由来板には、観音寺（市内万町）の第四世法印養仙住職が元禄十四年頃、寺の所有していたこの地（子安）に不動尊を祀ったが、明治の末期に撚糸業の内藤太兵衛なる人物が祠を改築し、不動尊を安置した。その後、火災に覆われ、昭和四十一年に再度改築されたと記している。



滝不動明王
奉納



内部 からくり竜王



滝不動尊

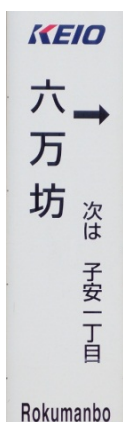
●六万坊のいわれ

子安町一丁目目付近

滝不動の祠と会館の建つ辺りから
一帯は「六万坊」と呼ばれている。
又、「藤井」とも呼ばれ、その昔遊行
僧（行者）または藤沢（神奈川県）
の遊行寺の行者が、庵を立て修業し
ていたといわれている。

敷地内には「鉦（かね）打坂」と
いわれる坂があり、今でも短い坂と
なっている。行者が近在におつとめ
に出るとき、最初に鉦を打つのが古
道に出る坂道だったようで、そこか
ら「鉦打ち坂」と呼ばれるようにな
ったといわれている。

庵のわきには「くりから竜王」を
祀るお堂があり、お堂には六万部の
経文が納められていたといわれてい
る。行者は六万部の経を修し、鉦を
敲（たた）いて近所の人々をも教化
したといわれている。後に六万部の
経を埋めた所を「ロクマンボン」「六
万坊」といった。



六万坊のバス停と信号



左 般若心経碑

⑤ 辻の地藏尊と小野路踏切

子安町（横浜線と京王線並列）

野猿街道六万坊交叉点を北に曲がると直ぐに小野路道に出る。その辻近くに灯明台と思われるものと地藏尊が安置されている。年代は不明だが昔から古道の安全を見守っている。この小野路道を五十m程東へ行くと横浜線と京王線が通る小野路踏切にでる。



六万経典を納めたと云われる経塚



辻の地藏尊

さらに小野路踏切の脇には地藏様と北野上組講中、昭和五十年（一九七五）四月と刻まれた新しい地藏菩薩が踏切利用者の安全を見守っている。



小野路踏切



安全を見守る地藏菩薩

⑥ 清満山弥勒院天龍寺

北野町五三二―二

宗派 真言宗智山派

本尊 不動明王

開山 清満法印

開創 天文年間（一五三二〜五五）

多摩八十八ヶ所八十二番札所で宇津木町龍光寺の末寺と伝えられる。

寺の起こりは天文年間（一五三二〜五五）に足利一族の末裔の、清満法印がこの地に巡錫され、建立した事が始まりとされている。寺は二度程火災で焼失し、現在の本堂は昭和三十九年（一九六四）再建立。

境内には弘法大師千百五十年恩忌に、記念行事として昭和五十九年（一九八四）に大日如来、釈迦、薬師、阿閼（あしゅく）、弥勒、地藏、観音、虚空蔵菩薩を加え十三仏とし、他に六波羅密菩薩、七観音、十二支守本尊の十二神将、鬼子母神等の現世、来世を司る仏像を建立している。



境内の十二神将像



天龍寺

⑦ 北野天満宮

北野町五五〇―一

勧請 横山党

祭神 菅原道真

社宝 入木末葉二品、良尚親王書

綱引き天神神社像

康永の石碑

例祭 四月二十五日

古くは元横山町の大義寺が別当寺といわれる。寛文四年（一六六四）三月に大義寺の真上法印が社殿を再建しているが、それより古く平安時代末期に活躍した横山党の一族が京の都に上り、北野天満宮をこの地に勧請したのが始まりで「北野」の地名の由来になっている。

後北条の滅亡後天正十九年（一五九二）十一月より江戸末期の万延元年（一八六〇）九月まで将軍家より五石の社領を受けている。毎年一月には徳川将軍家へ「武運長久」の祈禱札を献状する習慣が続けられていた。

社殿は明治十三年（一八八〇）唐破風向拝の社殿に再建、昭和五十一年（一九七六）菅公千七十五年忌事業では社殿を銅板葺きに改修。現在境内には唐破風の本殿始め覆殿、幣殿、拝殿、手水舎、神楽殿などの建物が並び、周りは巨木に囲まれ神木の「樺」は樹齢四百年を越えるといわれている。本殿裏には市指定文化財、北野石器時代住居跡が移築されている。また、南北期の板碑と句碑も立っている。



南北期の板碑と芭蕉句碑



左から菅公千年祭記念碑と北野天満宮、塩竈神社



北野天満宮

● 北野の塩竈神社

北野町五五〇——一

祭神 武御雷命

（たけみかずちのみこと）

夫津主命

（ふつぬしのみこと）

塩土老翁命

（しおつちおじのみこと）

北野天満宮本殿隣に、塩竈神社が、天満宮の末社として祀られている。創建年代は不明だが、製塩、魚業、安産の守護神を祀る神社としている。七月二十六日の例祭日には「お腹帯拝受」の崇敬者が多い。



菅原道真公

●天神さまと菅原道真

天神（天津）信仰が先で、後から菅原道真が結び付き天満宮（天神社）となった。

天神信仰には火雷天神（雷神信仰）もあり、怨霊の神様といわれている。怨霊の神様（火雷天神）と菅原道真との結び付きは九世紀末から十世紀始めの平安時代、菅原道真が宇多、醍醐両天皇に右大臣に命ぜられた頃左大臣の藤原時平の陰謀により大臣の地位を追われ、九州大宰府に流（左遷）された道真は悔し涙を飲み失意のうちに没す。延喜三年（九〇三）五十九歳。

道真の死後、疫病がはやり、天変地異が起こり、多くの死者を出した。天皇家と藤原一族に道真の怨念が襲いかかり、藤原時平（三十九）が亡くなり、醍醐天皇の皇太子（二十一）も亡くなり、皇太孫も五歳で亡くなった。

干ばつに見舞われ、朝廷の貴族達が雨乞いの話し合いをしていた時、急に天が曇り稲妻が光り、すぎましい音が鳴り響くと同時に、雷が貴族達の清涼殿に襲いかかり、落雷を受け多くの死傷者がでた。

この落雷は、道真の祟りだと恐れられた朝廷は、道真の罪を赦免し、贈位を行った。京都の北野には、元々から火雷天神という地主神が祀られており、その傍らに、道真の祟りを鎮めようと、朝廷は北野天満宮を建立し、道真の亡くなった大宰府にも、大宰府天満宮を建立した。

道真は火雷天神と合体したことで北野天神社の天満宮となり統一化された。つまり「天神社」は天満宮に母屋（本殿）を取られ表向き（ひさし）を貸しているような神社と見える。又、道真は生前優れた学者、歌人であったことから、天神は学問の神様として信仰されるようになった。

このように各地の天神社（菅原社）

の祭神となった道真は神号を天満大自在天神（てんまだいじざいてんじん）、日本太政威徳天（にほんだじょういとくてん）、通称天神様、火雷天神という。

北野も大宰府も別々に創建されたもので総本社、総本宮という呼称は用いず、「天神信仰発祥の地」といういい方をしている。

尚、道真を祀る神社は天満宮、天神社、北野神社、菅原神社、天神社という。

天神（天津神）は、天津信仰または天神講とよばれ農村各地で祀られているが、道真の天神社と一緒にされている。



菅家（小倉百人一首）
このたびは幣もとりの
あへず手向山もみちの
錦神のまにまに



「北野天神縁起絵巻」に書かれた清涼落雷事件



北野天神縁起絵巻・承久本（京都北野天満宮蔵）



大宰府天満宮の本殿右にある
神木「飛梅」



綱敷天神
（大阪佐太天満宮蔵）

●北野敷石住居跡

北野町五五〇——

八王子市北野事務所が建っている敷地は古くは北野天満社の領域で、後の市立由井小学校であった。昭和十六年（一九四一）小学校敷地裏で縄文時代中期末から後期初頭に位置すると思われる敷石住居跡が発掘された。

ローム層面を円形に浅く掘り下げた床面に河原石を敷き詰め、敷石の縁は石を縦に用いて周壁を作っている。中央には方形の炉跡が設けられている。また東側の片隅には二本の石棒が並べて置かれてあった、出土遺物は土器片数点、石斧一個、石棒二本、敲石二個が発見された。

その後住居跡は区画整理のため北野天満社境内に移され昭和三十一年（一九五六）三月三十日、市遺跡指定として保存されている。



北野敷石住居跡

●北野天満宮裏の板碑

北野町五五〇——

天満宮拝殿裏の軒下に南北朝期、康永四年（一三四五）十一月の板碑が建っているが、碑面は摩耗し風化している。聞くとところでは明神町の子安神社にも同じ板碑があるという。同時期に造られたもので、出土年代と保管が北野天満宮と子安神社に別々になったと思われる。



北野天満宮裏の板碑

●板碑（いたひ）とは

中世仏教で使われた供養塔。

板石卒塔婆（板石塔婆）と呼ばれる板状に加工した石材に梵字、種子（しゅじ）や被供養者名、供養年月日・供養内容を刻んだものである。

また頭部に二条線が刻まれるが省略されることもある、分布地域は主に関東地方だが全国にも存在し、鎌倉時代から室町時代前期に集中している。

板碑には人の冥福を祈る「追善供養」と、生きている人が死後極楽浄土に往生することを願う「逆修供養」がある。

南北朝、室町時代にかけて戦乱が多かった関東武士の不安や悩みが板碑（供養塔）に表われている。

●南北朝とは

天皇家（朝廷）が南朝（吉野）と北朝（京都）に分かれて半世紀五十六年の間対立した全国的な争乱。

建武二年（一三三九）足利尊氏が持明院統の光明天皇をたてたので、大覚寺統の後醍醐天皇は吉野（奈良県）に入り南朝を開いた。これに対し京都を北朝といい、以後南朝と北朝の争いとなった。

その後、足利氏の内輪騒動や荘園内の混乱が起こり、多くの社会的、政治的な変動があったため北朝と南朝の対立は長引いた。

南朝、元中九年、北朝、明德三年（一三九二）十月、時の將軍足利義満のすすめで吉野（南朝）の後龜山天皇は京都（北朝）の後小松天皇に神器を譲位することで京都に帰り南朝は解体し南北両朝統一、以後北朝が続く。

⑧京王北野駅

大正十四年（一九二五）三月二十四日、民家もまばらで少なく、遠くに天神さまの杜が見える、辺り一面の田園地帯に玉南電気鉄道の北野駅が開業した。

大正十五年合併により京王電気軌道の駅となり、昭和六年には御陵線北野多摩御陵前が開業された。昭和十九年東京急行電鉄と合併し大東急の駅となる。昭和二十年御陵線が閉業、いまだに御陵線の橋脚が長房町の住宅地に残る。昭和二十三年東急から分離独立、京王帝都電鉄の駅となり現在に至っている。

昭和四十二年高尾線北野、高尾山口が開通、平成二年高架駅となり踏切がなくなる。平成四年上りホームが完成し複線となる。平成十三年には準特急停車駅となり一日の乗降人員は平均二万五千人を数える。駅の周りは商業市街地、八王子の東の玄関口として活気にあふれている。



京王線北野駅ロータリー
中央にある「田植えの像」



変貌する京王線北野駅

●北野町沿革小史

南北朝期の鎌倉、室町時代に船木田荘といわれ「北野」の名が有り、戦国期から安土桃山時代には大石氏から後北条（氏照）の支配で「由井領」に北野の名が有り、江戸幕府の頃、旗本領と寺院領に支配された北野村の名が有る。

明治十一年（一八七八）七月二十二日郡区町村編制法により神奈川県南多摩郡の発足と共に北野村が起立。明治二十二年（一八八九）四月一日町村制の施行に伴い、周辺の五ヶ村と合併し由井村が成立。

明治二十六年（一八九三）南多摩郡は東京府に移管（昭和十八年都制）、昭和三十年（一九五五）四月一日八王子市に編入合併、「由井村」の村名は消える。

旧北野村、旧打越村、旧西長沼村、旧小比企村、旧片倉村、旧宇津貫村の旧由井村大字は八王子市の行政名で残る。

昭和四十年（一九六五）頃から十五年の歳月をかけ住宅と工場が混在する区画整理事業が行われ、工業と住宅地域に開発された。区画事業が完成した昭和五十六年（一九八一）五月、京王北野駅広場に完成記念像「田植えの像」が完成。

町内には、総合卸売センター、地方卸売市場、魚市場、生花市場を始め物流センター、京王重機整備や日本水産八王子工場などの大型企業と、八王子市の衛生処理センター、下水処理場、清掃工場などが建ち、余熱を利用した「あったかホール」は、市民の憩いの場となっている。街は道路も整備されマンションが建ちならび、発展している。

●北野の小字名

「七日市場」西部の子安町の堺、
「和田」和田団地がある、
「石田」和田の東、明神町の境、
「中田」山田川に中田橋が架かる、
「岸田」町内の中心部、
「上の原」横浜線の西で高台地区、
「六万坊」子安町の境バス停がある、
「上組」六万坊の近く天龍寺がある、
「中組」バイパスの西側地区
「下組」北野天神、日本水産がある、
「原の前」長沼町の境、

七日市場、六万坊は丘陵地の雑木林であったようだ。

和田、石田、中田、岸田は名のとおり一面が田圃であった。

原の前は湯殿川が流れ長沼町に接した田圃であった。

北野の中心は上、中、下組の集落で、とくに下組は古くから北野天神があり、村役場ができ、人家が多く現在も北野駅を中心に発展している。

⑨由井小学校に残る

赤レンガの門

打越町二八四

由井小学校の前身は明治六年（一八七三）北野天満社境内に「北野学舎」として開校され、明治十年（一八七七）には天満社の西隣に移り、この頃、正門が赤レンガ作りとなった。

大正六年（一九一七）現在の八王子由井事務所のある辺りに「赤レンガ門」と共に移された。昭和四十一年（一九六六）現在の敷地に移り、由井第一小学校として現在に至る。

煉瓦（れんが）は幕末維新後の西洋文化に見習った日本の近代建築の基礎となり需要が多かったといわれている。

由井小学校の赤レンガ門は、明治末期から大正年間に、北野町にあった「大阪窯業」八王子工場で生産されていた煉瓦（レンガ）を使用したと思われる。



（大正4年建立）



由井第一小学校の赤レンガ門

（現在）

大阪窯業八王子工場跡地

(長沼煉瓦場)

長沼町一二〇二番地付近

京王北野駅と長沼駅の中間位置から市立打越中学校、下田公園の間を、湯殿川が流れ春日橋が架かる上流右岸、一二〇二番地一帯に明治三十年（一八九七）四月十五日、八王子煉瓦製造会社が操業をはじめた。その後、八王子煉瓦は明治四十年（一九〇七）関東煉瓦会社を買収、明治四十五年関東煉瓦は大阪窯業に買収。大坂窯業は「大阪窯業株式会社八王子工場」と称した。

敷地面積 一万九百八十二坪
建物面積 千六百七十坪
現場従業員 二百名
従業員社宅 五十軒
年間生産 一千万個

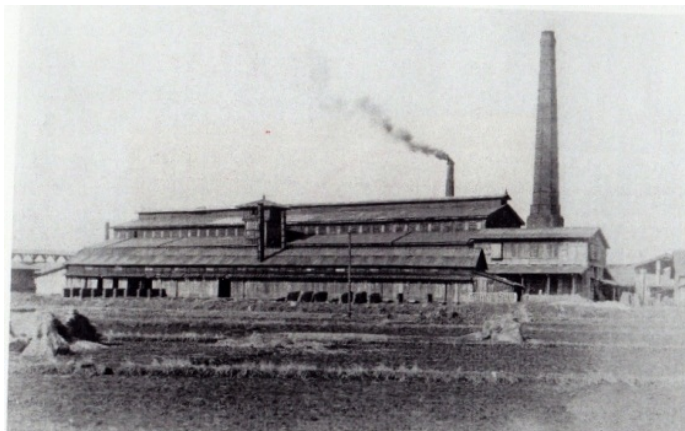
明治四十年頃に、現在の中央線貨物ターミナル付近から引かれていた引込み線が、本線の交通増加に伴って、横浜線からの引込み線に変更

し、操業を続けていたが、大正十二年九月関東大震災が起き、八王子工場は煙突、乾燥室、機械室が倒壊した。火災も発生したが従業員の防火活動によって焼失をまぬがれた。

この頃から煉瓦造りの建物は地震に弱いという不信が世評に強まった事とコンクリート建築の普及等によって、煉瓦の需要が急速に減退し、煉瓦建築の時代は、終わりを告げていった。

八王子工場は、大正十四年五月から舗道煉瓦の製造に変更したが、昭和七年六月十日の夜、作業場から出火し、風もあって工場は全焼。工場は閉鎖となり同社の東京工場のある埼玉県草加市へ移転。

工場跡地は新しく道路整備され、住宅が建ち並び、煉瓦工場の面影は無く、横浜線から引いていた引き込み線の橋脚が、子安町一丁目の住宅地に残る。



長沼の煉瓦工場（昭和39年9月）



煉瓦工場引き込み線跡の橋脚

⑩ 浅川と湯殿川

浅川は、神奈川県相模原市（佐野川地区）の境目にある陣馬山や堂所山に源を発す案下川から北浅川となり、途中八王子市役所付近の鶴巻で小仏城山、高尾山辺りから流れる南浅川と合流し「浅川」となり、大和田町付近で、日野市の境目である長沼町の湯殿川と合流する延長約三〇・一五kmの一級河川。（日野市石田、落川付近で多摩川に合流）

湯殿川は、八王子市館町の館ヶ丘団地と拓殖大学敷地内（以前は谷戸で沢があつて現在は貯水池に改修）から流れでる川で、町田街道を横切り梶田、寺田、大船、小比企などの集落を流れ、片倉、打越を経て、長沼町で浅川と合流する延長約八・九kmの一級河川。



左：湯殿川 右：浅川

浅川に架かる中央線の鉄橋

●湯殿川の名の起こりと

中世武士団横山党

湯殿川は、館町（旧、横山村）から流れ出て、棚田、寺田、大船、小比企、片倉、打越を経て、長沼で浅川に合流する延長約十一kmの川である。途中の上小比企で約百〇二百万年前の象の奥歯が発見され話題となった。

歴史をひもとくと、永保三年（一〇八三）の前九年の役の頃、横山党の党主、横山経兼（つねかね）は奥州征伐の大将、源頼義（みなもとよりよし）に従って奥州に行った。

その時、出羽三山のひとつである湯殿山に参詣した。その後、出羽の地を離れ、戦いに勝利したということから、横山の地に戻り、湯殿山（山岳信仰）を信仰し、自分の館の西南の方向に大日堂を建て本尊の大日如来を作らせて安置した。

その場所は町田街道を挟んだ、現在の拓殖大学の奥にある堂平（堂側ともいう）で、そこには湧き水の池

があり、そこから流れ出る川を湯殿川と呼ぶようになったといわれる。

大日堂はその後、竜見寺の裏山（堂山）に移り、更に現在の竜見寺境内に移った。

横山党本拠地の館がこの地「館町」にあったという説もあり、八王子の歴史に大きく関係する場所であることが注目される。

その後の遺跡調査でも、この地域は古代から奈良、平安、近世に至る幅広い生活の跡が解ってきている。



横山神社（八幡八雲神社敷地内）
横山党の開祖、横山義孝を祀る

⑪ あったかホール

北野町五九六―三

平成九年（一九九七）十月にオープン。八王子市民の環境学習、環境活動の拠点として設立。

隣接する清掃工場から出るごみ焼却余熱で温水プールや浴室、館内の冷暖房に活用。環境学習を主体に、健康増進、コミュニケーション、文化活動等に幅広く活用できる複合施設。



あったかホール

◎参考資料

- ・ 小山氏集収資料 小山祐三所蔵
- ・ 南多摩神社誌 八南神職会
- ・ 八王子寺院めぐり 八王子仏教会
- ・ 八王子の歴史 樋口豊治著
- ・ 八王子発見 中島善弥著
- ・ 八王子物語（中） 佐藤孝太郎著
- ・ 多摩歴史散歩 佐藤孝太郎著
- ・ 長沼・北野町わが街 清水正之著
- ・ 京王五十三次 清水正之著
- ・ 武蔵野歴史地理（八王子地方） 高橋源一郎著
- ・ 新編武蔵風土記稿（第五卷）
- ・ 八王子宿のうつりかわり 八王子市郷土資料館
- ・ 甲州道中分間延絵図（第二巻・解説編） 東京美術
- ・ 東京新聞
- ・ インターネット各ページ
- ・ 昭文社
- ・ 八王子市地図
- ・ 八王子市観光マップ
- ・ 八王子市郷土資料館資料

メモ